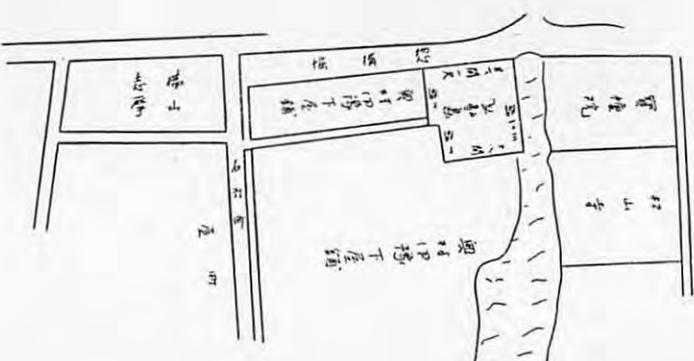


其の舊地は寶幢寺坂の高にて、後に奥村氏の第地へ取込に成りたり。其の地延寶の金澤圖に下の如く之を載す。按ずるに、寶幢寺は、延寶二年の由來書に、利家卿越前府中に御在城の頃、當寺開山覺祝法印へ祈禱命ぜられ、利長卿加州松任へ御移の頃召連られ、愛宕堂建立す。其以後越中富山へ御移の節も召連られ、彼地に於て愛宕堂御建立ありて祈禱命ぜられ、又金澤へ召連られ、小立野に屋敷地拜領、愛宕堂造立祈禱命ぜられたり。五代住職祐悟法印の時、利常卿一七日護身法を請けさせられ、六代祐慶法印の時、光高卿當時の來歴聞召され、加賀一國の眞言宗觸頭命ぜらる。とありて、愛宕寶幢寺と稱し、愛宕社の別當也。文化三年の由來書に、於八坂千二拾六步拜領、愛宕堂御建立、明暦元年御意を以て御家中奉加仕再建之處、惣構水筋にて連々崩込に付移轉之儀相願、寶永元年に小立野上野に於て替地拜領、愛宕堂暨寺共建立。其節松木二千五百本拜領被仰付、三ヶ國勸化之儀相願造立仕。とありて、舊藩中は神社奉行直支配の寺柄にて、祈禱所の一ヶ寺なり。按ずるに、昔は寶幢寺と卯辰明王院とを兩愛宕と稱し、兩寺共に愛宕



社の別當にて、共に藩侯の祈禱所なり。利長卿の親翰にも左の如く載せ給へり。

兩あたごよりのすみつき見申候。大なごんより我々代まで、正・五・九月のきたう、あたごよりせられ候て、いままつてまへのごとくによく候べく候。さだめてなみへきもせかれと、小松に申候をりより、きたうをもせられ候て、へんだんにもよく候はんや。何様にも申事なきやうに、きもいり申候べく候し。

八月廿四日

は ひ

左馬介

づしよ參

右は利長卿眞筆の寫也。篠原出羽守一孝の判書にも、富山様より御書頂戴、正・五・九月の御祈禱不替替兩愛宕へ被仰付旨云々。と見えなれば、富山に在城し給ふ頃賜はりたる親簡なりしと聞ゆ。三壺記に、慶長十四年富山城火災に付き越中關野に新城を築かれ、利長卿御移徙の時、波着寺法印・兩愛宕法印來て祈禱被仰付と見えたり。されば彼の延寶の由來書に、富山へ御移の時召連られ、富山に於て愛

宕堂御建立と載せたるは過聞ならんか。又慶長十八年二月朔日横山山城守長知等連署の奉書に、愛宕寶幢坊とあり。

其の時代は寶幢坊と稱せしと聞ゆ。さて其の後々も兩愛宕とて、寶幢寺・明王院の兩寺は並に愛宕社の別當なりしが、明治二年の春神佛混淆御廢止に付き、明王院は復飾して神職と成り、寶幢寺は願に依て復飾せず、其儘なりしゆゑ、寶幢寺の愛宕の神像は卯辰愛宕へ合併相成り、愛宕社は卯辰一社に成りたる處、卯辰愛宕も明治六年に豐國神社へ合併相成り、今は兩愛宕共に社殿は絶えたりけり。おもふに藩祖利家卿は、殊に愛宕神を尊崇し給ひけん。信長公の時代諸方の合戦に、愛宕の神靈を篤く祈念し給ふよし、村井長明の陳善録等に見えたり。村井又兵衛長頼なども、戰場にて愛宕の靈異を蒙りたる話どもを載せなれば、戰國の頃は武士の戦功を心懸ける人々は、皆愛宕神を信仰しけるならはしなりけん。故に利家卿利長卿も、愛宕社を造立して祈禱所となし給ひたるならんか。

○田井城跡

三州志古墟考に云ふ。田井故墟、石川郡金浦郷田井村領に